

(4) 昆虫類

2025 年版レッドリストに掲載された昆虫類のうち、新たにリストに掲載された種について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種についても、絶滅種・絶滅危惧種とほぼ同じ様式で記述した。一部の情報不足種については、簡易な解説を記述した。

【掲載種の解説（昆虫類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列はレッドリストに従った。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「環境省レッドリスト 2020」の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。

【評価理由】

対象種の愛知県における絶滅のおそれの程度を評価した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。また、一部の種については写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用または記録として使用した文献を、著者、発行年、表題、雑誌名、掲載頁または総頁数、あるいは発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献のうち、代表的なものを、著者、発行年、表題、雑誌名、掲載頁または総頁数、あるいは発行機関とその所在地の順に掲載した。

オオサカアオゴミムシ *Callistoides pericallus* Redtenbacher

【評価理由】

1957年の桂川基久男氏採集標本を最後に確認できていない。平野部や里山などの湿潤環境に生息する昆虫類の多くが減少しており、尾張地域では庄内川の河川環境の改修により絶滅したと考えられる。

【形態】

体長 11.3～12mm。頭部は緑色で光沢がある。前胸背板と脚は橙色。上翅は黒色で光沢はなく橙色に縁どられる。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市（戸田，2022）。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。



名古屋市西区, 1957年10月12日, 桂川基久男 採集

【生息地の環境／生態的特性】

平地や里山の湿地、水田の縁や水路脇、河川敷などに生息する。走光性があり、燈火に飛来することもある。関東地方の平野部ではよく見られるが、全国的には少ない種である。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市の庄内川河川敷にて得られているが、その後の河川改修などにより絶滅したと考えられる。

【保全上の留意点】

現在、平野部の湿潤環境は、ため池や河川敷が多くを占め、都市部で農薬使用の少ない水田などは激減している。よって、ため池や河川の改修は、そこに生息している種について慎重に検討し、行う必要がある。本種も水生種ではないが、湿地的な環境を好むため護岸などで簡単に絶滅すると考えられる。

【引用文献】

戸田尚希, 2022. 桂川基久男氏の蒐集したゴミムシ類. 佳香蝶, 74 (290): 44-45. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

【関連文献】

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編, 1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅱ), 514pp. 保育社, 東京.

(執筆者 戸田尚希)

エチゴトックリゴミムシ *Oodes echigonus* Habu et Baba

【評価理由】

戦前に名古屋市内で採集された標本が確認された（長谷川ほか, 2015）が、80 年以上生息状況がないこと、本種の生息が確認された名古屋港周辺の低湿地環境はすでに失われていることから「絶滅」と評価された。

【形態】

体長 15 mm 内外。オオトックリゴミムシに類似するが、下唇中央歯の先端が陥入しないこと、前胸腹板突起が縁取られること等によって区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

1942 年に現在の名古屋市港区土古付近で採集された標本が 2 点現存するのみ。

【国内の分布】

本州、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



名古屋市, 長谷川道明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

池沼の岸边、湿地、水田周辺などの湿性草地に生息する。沿岸部を中心に分布すると推測されるが、詳細は不明。

【現在の生息状況／減少の要因】

80 年以上生息確認がない。

池沼周辺、河川敷など平野部（特に沿岸部）の湿地環境を伴う環境の減少、消失、変質。水質汚濁による水辺環境の悪化。

【保全上の留意点】

沿岸部の低湿地を分布域とする種と考えられるので、現在、沿岸部に残る低湿地環境を残すことが、本種の将来的な自然回復の可能性を残す唯一の方法であるばかりでなく、多くの水生生物にとっても有効な保全手段となる。

【引用文献】

長谷川道明・蟹江昇・戸田尚希, 2015. 愛知県のトックリゴミムシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (25): 21-24. 豊橋市自然史博物館, 豊橋市.

(執筆者 長谷川道明)

スジマグソコガネ *Aphodius rugosostriatus* Waterhouse

【評価理由】

かつて平野部や丘陵地に多く点在していた牧場は、都市化、宅地化が進むにつれ、環境問題から山間部へと移転したり、県内から姿を消したりしている。こういった牧場に依存している本種は、見るができなくなった。

【形態】

体長 4.4～6.8mm。光沢のある赤褐色から暗褐色。頭部は中央が隆まらず、会合線中央は隆起する。前胸背板は大小の点刻を散布する。上翅条溝は深く、条溝内の点刻は強く横長で間室にはみ出し、間室は隆起し小点刻を散布する(川井ほか, 2005)。

【分布の概要】

【県内の分布】

春日井市、岡崎市(戸田ほか, 2022)。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、佐渡島、隠岐島、五島列島(岡島・荒谷, 2012)。

【世界の分布】

済州島、朝鮮半島、中国、シベリア(岡島・荒谷, 2012)。



春日井市, 1955年6月17日, M. Sugiyama 採集

【生息地の環境／生態的特性】

放牧地などのオープンランドから見つかることが多い。新鮮な牛・馬・鹿などの糞に集まる。

【現在の生息状況／減少の要因】

平地の放牧地の牛糞でかつては普通に見られる種であったが、こういった平地の牧場や草地に依存していた本種は、牧場の減少や移転により、1962年の標本を最後に見つかっていない。

【保全上の留意点】

本種に限らず平野部の牧場は減っており、その様な日当たりの良い草原環境や、そういった場所での動物の糞で生活している種は減少の一途である。

【引用文献】

- 川井信矢・堀繁久・河原正和・稲垣政志, 2005. 日本産コガネムシ上科図説 第1巻 食糞群 1: 104. 昆虫文献六本脚, 東京.
戸田尚希・長谷川道明・春田祥博・安居義高・中村俊雄・大野友豪・蟹江昇, 2022. 愛知県の甲虫目録9 (コガネムシ科: ニセマグソコガネ亜科, マグソコガネ亜科). 佳香蝶, 74 (289): 1-19. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.
岡島秀治・荒谷邦雄, 2012. スジマグソコガネ. コガネムシ科マグソコガネムシ亜科, 日本産コガネムシ上科標準図鑑, p.239, (株)学研教育出版, 東京.

(執筆者 戸田尚希)

クロホシコガシラミズムシ *Haliphus basinotatus* Zimmermann

【評価理由】

全国的にも生息地は限定的で、愛知県内でも限られており、見つかる個体数も減少している。現在残っている環境が浚渫などで改変されれば直ぐにでも絶滅となることが容易に考えられる。

【形態】

背面は黄褐色。頭部は橙色味を帯び、後方に黒斑がある。上翅には5～6対程度の黒斑があり、会合部は黒色縦条となる。上翅基部の模様は変異がある（中島ほか, 2020）。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市、豊田市、瀬戸市、田原市（戸田ほか, 2020）と犬山市（緋田ほか, 2021）。

【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬（中島ほか, 2020）。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア極東部（中島ほか, 2020）。



【生息地の環境／生態的特性】

植物の豊富な池沼や水田脇の水路などに生息し、抽水植物や沈水植物が豊富な環境を好む。幼虫はシャジクモ類を食べる事が知られる（中島ほか, 2020）。

【現在の生息状況／減少の要因】

犬山市の生息地での個体数は多くなく、生息地のため池は浚渫された。保護のため流入部にワンドを設けたが、現在すべて埋め立てられ、生息は確認されていない。この池の周囲の生息地は未確認である。また豊田市の生息地では、コイの養殖がなされており、部分的に残っている浅瀬で見られる。いずれも小さな環境で、失われれば直ぐに絶滅することが懸念される。

【保全上の留意点】

生息地周辺の環境開発などは慎重を期し、生息地のため池自体の保全が必要である。

【引用文献】

- 緋田祐太・森井隆文・大野友豪・池竹弘旭, 2021. 愛知県犬山市にてチュウブホソガムシとクロホシコガシラミズムシを採集. 佳香蝶, 73 (285): 13-14. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.
- 中島淳・林成多・石田和男・北野忠・吉富博之, 2020. ネイチャーガイド日本の水生昆虫, 352pp. 文一総合出版, 東京.
- 戸田尚希・長谷川道明・市川靖浩・池竹弘旭・蟹江昇, 2020. 愛知県の甲虫目録6（コガシラミズムシ科, ミズスマシ科）. 佳香蝶, 72 (281): 54-60. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

（執筆者 戸田尚希）

ムモンチビコツブゲンゴロウ *Neohydrocoptus* sp.

【評価理由】

2021年に本種の生息が愛知県でも確認された種で、生息している池は限定している。今後の調査により、新たに生息地が確認される可能性はないではないが、現状は限定的でアメリカザリガニやハスなどの外来種も多く、これ以上の悪化では生息できなくなる可能性が高い。

【形態】

2.2～2.3mm。背面は橙色味の強い黄褐色。上翅はより暗色となる。目立つもようは無い。（中島ほか, 2020）

【分布の概要】

【県内の分布】

常滑市（戸田, 2021）。

【国内の分布】

本州（東海地方以西）、四国、九州、南西諸島（中島ほか, 2020）

【世界の分布】

不明。



常滑市, 2021年5月20日, 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

水生植物が豊富な池に生息する。既知産地は全国的にも極めて限られる。1990年代から存在は確認されているが、現在に至るまで学名は未決定である（中島ほか, 2020）。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種が得られているのは、住宅が隣接するため池で、ハスが繁茂しアメリカザリガニも多産している（戸田, 2021）。水田の圃場整備、水質の汚染などによる生息地の減少、環境悪化が主要な減少の原因と推測される。

【保全上の留意点】

現在ある自然度の高い池をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。

【引用文献】

中島淳・林成多・石田和男・北野忠・吉富博之, 2020. ネイチャーガイド日本の水生昆虫, 352pp. 文一総合出版, 東京.
戸田尚希, 2021. 愛知県にてムモンチビコツブゲンゴロウを確認. 月刊むし, 610: 9. むし社, 東京.

（執筆者 戸田尚希）

スナハラゴミムシ *Diplocheila elongata* (Bates)

【評価理由】

近年、関東地方の一部を除いては、生息確認が極めて困難になっている。愛知県では、1999～2002年に豊橋市内で採集された標本が4点確認され、本県にも分布していることが明らかになった（長谷川原稿準備中）が、他に情報がなく、また本種に適した水辺環境が悪化していることから、危機的状況に陥っている可能性が高い。

【形態】

体長23mm内外。オオスナハラゴミムシに似るが、光沢があり、頭楯の前縁が平ら、複眼内側の剛毛が1本などの特徴により区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内ではこれまで記録が知られていなかったが（間野，2018）、1999～2002年にかけて豊橋市内で採集された4点の標本が確認された。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。



豊橋市，長谷川道明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河川敷や池沼の岸边、水田周辺などの湿性草地に生息する。8月下旬に新成虫が出現するというが、生態的な情報に乏しい。夜行性で、灯火にも飛来する。成虫は際の泥地でタニシなどの水生巻貝を好んで捕食することが観察されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

池沼周辺、河川敷など平野部の湿地環境を伴う環境の減少、消失、変質。水質汚濁による水辺環境の悪化。圃場整備による水田とその周辺環境の画一化。休耕田の管理放棄、遷移進行にともなう湿地の乾燥化などが要因として考えられる。また、水田周辺に生息する種であることから、農薬の影響を受けた可能性も考えられる。

【保全上の留意点】

2002年まで確認されていたことから、本種が確認された豊橋市や同様の環境がある地域で、本種の生息確認調査を実施する必要がある。

【引用文献】

間野隆裕編，2018. 愛知県の生物多様性 グリーンデータブックあいち 2018 昆虫編，280pp，愛知県環境部自然環境課. 名古屋.

（執筆者 長谷川道明）

チュウブホソガムシ *Hydrochus chubu* Balfour-Browne et M.Satō

【評価理由】

本種は県内で犬山市の1カ所のみが確認されていたが、ため池の改修によりダメージを受けている。

【形態】

2.4～2.5mm。背面は暗褐色から茶褐色で青緑色の金属光沢をもつ。頭部と前胸背板は暗色。上翅に不明瞭な暗色紋がある。上翅の奇数間室の隆起は明瞭（中島ほか, 2020）。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市（緋田ほか, 2021）。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布。近県では三重県（三重県, 2015）や滋賀県（滋賀県, 2015）に分布する。

【世界の分布】

日本、韓国（Dae-Hyun Lee et al., 2013）。



犬山市, 2019年9月7日, 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

植物の豊富な池沼や水田脇の水路などに生息し、抽水植物や沈水植物が豊富な環境を好む。幼虫はシャクジモ類を食べる事が知られる（中島ほか, 2020）。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地での個体数は多かったが、生息地のため池は浚渫された。保護のため流入部にワンドを設けたが、現在すべて埋め立てられ、生息は確認されていない。この池の周囲の生息地は未確認であるが、環境が失われれば直ぐに絶滅することが懸念される。

【保全上の留意点】

生息地周辺の環境開発などは慎重を期し、生息地のため池自体の保全が必要である。

【引用文献】

- Dae-Hyun Lee・Soong Hwa Lee・Kee-Jeong Ahn, 2013. Taxonomy of the Genus *Hydrochus* (Coleoptera: Hydrophilidae: Hydrochinae) in Korea. Anim. Syst. Evol. Divers. Vol.29, No.3: 249-252.
緋田祐太・森井隆文・大野友豪・池竹弘旭, 2021. 愛知県犬山市にてチュウブホソガムシとクロホシコガシラミズムシを採集. 佳香蝶, 73 (285): 13-14.
三重県農林水産部みどり共生推進課, 2015. 7 昆虫類. 三重県レッドデータブック 2015 ～三重県の絶滅のおそれのある野生生物～: 146. 三重県農林水産部みどり共生推進課.
中島淳・林成多・石田和男・北野忠・吉富博之, 2020. ネイチャーガイド日本の水生昆虫, 352pp. 文一総合出版, 東京.
滋賀県生きもの総合調査委員会編, 2016. 滋賀県で大切にすべき野生生物－滋賀県レッドデータブック 2015 年版－, 368 pp. 滋賀県.

（執筆者 戸田尚希）

エンデンチビマルガムシ *Paracymus aeneus* (Germar)

【評価理由】

本種は塩性湿地に生息するが、海岸部は堰堤が整備され、河川以外で塩水が流入する汽水環境が見られなくなった。

【形態】

体長 2.9～3.0mm。背面は黒色で光沢があり、近似のチビマルガムシに比べより強く大きな点刻が密にある。中胸腹板突起後方の薄板はやや発達する（中島ほか, 2012）。

【分布の概要】

【県内の分布】

弥富市、西尾市（戸田, 2022）。

【国内の分布】

岡山県、大分県（中島ほか, 2020）、対馬（小林, 2020）。

【世界の分布】

ロシア極東部からヨーロッパ。



弥富市, 2009年7月20日, 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

塩性湿地に生息し、海岸付近の植物が散在する浅い湿地で見つかる。灯火にも飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息環境が限定的であるため、現在の生息地が失われれば直ぐに絶滅することが懸念される。

【保全上の留意点】

汽水域という特殊な環境であるため、周辺環境開発などは慎重を期し、生息地自体の保全が必要である。

【引用文献】

小林温, 2020. 長崎県対馬からエンデンチビマルガムシの記録. 月刊むし, 592: 58. むし社, 東京.
中島淳・林成多・石田和男・北野忠・吉富博之, 2020. ネイチャーガイド日本の水生昆虫, 352pp. 文一総合出版, 東京.
戸田尚希, 2022. エンデンチビマルガムシを愛知県で採集. 月刊むし, 614: 46. むし社, 東京.

（執筆者 戸田尚希）

コスジマグソコガネ *Aphodius lewisi* C.O.Waterhouse

【評価理由】

かつて平野部や丘陵地に多く点在していた牧場は、都市化、宅地化が進むにつれ、環境問題から山間部へと移転したり、県内から姿を消したりしている。現在は山間部でシカ糞に依存したものが、かろうじて確認されている。

【形態】

体長 2.9～4.0mm。やや光沢の鈍い赤褐色から褐色。頭部は前縁がわずかに湾入し、頭楯は中央がやや隆まり、会合線上にコブ状隆起はなく、複眼は大きい。前胸背板は大小の点刻をやや密に散布する。上翅条溝は細く、低い隆条で縁どられ、間室の中央に稜状の隆起をもつ（川井ほか, 2005）。

【分布の概要】

【県内の分布】

春日井市（戸田ほか, 2022）、豊川市。

【国内の分布】

北海道、本州、九州、八丈島、八丈小島、奄美大島（岡島・荒谷, 2012）。

【世界の分布】

台湾、朝鮮半島、中国、タイ、インド、ネパール、スリランカ、フィリピン、ジャワ島、ボルネオ島（岡島・荒谷, 2012）。



春日井市, 1954年9月4日, 更科廣 採集

【生息地の環境／生態的特性】

分布は局地的で、放牧地などのオープンランドから見つかることが多い。新鮮な牛・鹿などの糞に集まるが、開けた土地の人糞や、林内のシカ糞から見つかる事もある。

【現在の生息状況／減少の要因】

平地の放牧地の牛糞でかつては普通に見られる種であったが、こういった平地の牧場や草地に依存していたものは牧場の減少や移転により、1955年の標本を最後に見つかっていない。現在、山間部のシカ糞に依存し、かろうじて生息が確認されている。

【保全上の留意点】

本種に限らず平野部の牧場は減っており、日当たりの良い草原環境や、そういった場所での動物の糞で生活している種は減少の一途である。

【引用文献】

川井信矢・堀繁久・河原正和・稲垣政志, 2005. 日本産コガネムシ上科図説 第1巻 食糞群 1: 101. 昆虫文献六本脚, 東京.
戸田尚希・長谷川道明・春田祥博・安居義高・中村俊雄・大野友豪・蟹江昇, 2022. 愛知県の甲虫目録9（コガネムシ科：ニセマグソコガネ亜科, マグソコガネ亜科）. 佳香蝶, 74 (289): 1-19. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.
岡島秀治・荒谷邦雄, 2012. コスジマグソコガネ. コガネムシ科マグソコガネムシ亜科, 日本産コガネムシ上科標準図鑑. p.237, (株)学研教育出版, 東京.

（執筆者 戸田尚希）

ダンドナガゴミムシ *Pterostichus dandonis dandonis* Kasahara

【評価理由】

愛知県の特産種で、生息地は限定的である。原生林内の沢沿いにみられるが、近年のシカ害により、林床の乾燥化に拍車がかかり減少が続いている。

【形態】

12.4～13mm（KASAHARA, 1990）。体は黒色で脚は濃い茶褐色。上翅は深い条線のみで、孔点以外に点刻はない。後翅は退化し飛べない。オスの腹端節中央後方は下方に向けて突出する（黒澤ほか, 1995）。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市稲武町、北設楽郡設楽町。

【国内の分布】

本州（愛知県）。

【世界の分布】

日本の固有種である。



設楽町, 2002年6月2日, 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

原生林内の沢の石下にみられる。他のナガゴミムシ類に比べ比較的水辺に近い環境を好む。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地の原生林ではシカ害とスズタケの枯死にともない、林床の乾燥化が著しい。シカによる下草の食害を早急に対処しなければ、多くの種が失われるであろう。

【保全上の留意点】

生息地周辺の伐採、遊歩道の設置保守などの際、小さな沢の改変はせず、林床の乾燥をまねく事象は避けるべきである。

【引用文献】

KASAHARA, Sumao (1990). A New Subspecies of *Pterostichus dandonis* (Coleoptera, Carabidae) from Kappa-do Cave in Aichi Prefecture, Central Japan. *Elytra*, Tokyo, 18(2).

黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之, 1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅲ), 514pp. 保育社, 東京.

（執筆者 戸田尚希）

セトナガゴミムシ *Pterostichus taoi* Kasahara

【評価理由】

県内の分布は瀬戸市とその周辺域に限定しており、生息環境は限られている。森林の乾燥化により、個体数は年々減少している。

【形態】

14.7～15.1mm（KASAHARA, 1993）。体は黒色で脚は濃い茶褐色。上翅は深い条線のみで、孔点以外に点刻はない。後翅は退化し飛べない。オスの腹端節中央後方は非対称に湾入するが、深くはえぐられない。

【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市、豊田市。

【国内の分布】

本州（愛知県、岐阜県）。

【世界の分布】

日本の固有種である。



瀬戸市, 2003年9月28日, 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫・成虫とも低山地にある溪流沿いの枯れ葉など堆積物が溜まった湿地に生息する。秋に新成虫が出現し、成虫で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息している湿地環境自体が限られており、見つかる場所はとても少なく、河川の整備などによる林床の乾燥化は、本種の生息に深刻な影響を与える。

【保全上の留意点】

生息地周辺の森林の開発などは慎重を期し、生息地の溪流やそれに伴う湿地の保全が必要である。

【引用文献】

KASAHARA, Sumao (1993). Two New Pterostichine Carabid Beetles Found on Low Mountains in Central, Japan. *Elytra*, Tokyo, 21(2): 337-345.
上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅱ), 526pp. 保育社, 東京.

（執筆者 戸田尚希）

オオフタホシマグソコガネ *Aphodius elegans* Alliberi

【評価理由】

牧場周辺の住民から、衛生環境の改善要望等により牧場が新設移転したことや、牧場の廃業など、生息環境が減少したため生息地が奪われ減少している。かつては市街地近郊や丘陵地にあった牧場も姿を消し、近年生息は確認されていない。残された牧場も少なく、少しの土壌改善でも生息に影響がでることから、継続発生が危惧されている。

【形態】

11～13mm。雄の頭部には角状突起を持つ。特徴的な色彩をもつ大型のマグソコガネである（戸田ほか，2022）。

【分布の概要】

【県内の分布】

春日井市、長久手市、豊田市の記録（戸田ほか，2022）があるが、現在は豊田市以外の生息が確認できない。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島、対馬、屋久島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島（川井，2005）。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。



豊田市，2013年10月27日，戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

真冬を除く秋季から春季に牧場など日当たりの良い獣糞に集まる。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在は県内2カ所の牧場のみの一部の区画でしか確認されていない。

【保全上の留意点】

生息する牧場の土壌改良や、放牧の減少が生息に影響するため、これらを行う際には配慮が必要である。

【引用文献】

川井信矢・堀繁久・河原正和・稲垣政志，2005. 日本産コガネムシ上科図説 第1巻 食糞群1. 昆虫文献六本脚，東京。
戸田尚希・長谷川道明・春田祥博・安居義高・中村俊雄・大野友豪・蟹江昇，2022. 愛知県の甲虫目録9（コガネムシ科：ニセマグソコガネ亜科，マグソコガネ亜科）. 佳香蝶，74（289）：1-19. 名古屋昆虫同好会，名古屋。

（執筆者 戸田尚希）

ヒメカクスナゴミムシダマシ *Gonocephalum terminale* Reichardt

【評価理由】

河川および海岸砂浜に生息する種で、県内では知多半島及び渥美半島の海岸砂浜に生息している。沿岸域から陸域への移行帯に生息する種と考えられるが、近年護岸工事が盛んに行われた結果、沿岸域と陸域の断絶により県内における生息地の消失が懸念される。

【形態】

体長 9.5～11.8 mm。背面は黒色で光沢は鈍く、灰色の分泌物で覆われていることが多い。同属のカクスナゴミムシダマシとよく似るが、雄の前脛節基部が抉れないことや、上翅が短いことで識別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

常滑市小林町蒲池海岸、南知多町内海小桁つぶて浦、美浜町野間海岸、美浜町奥田、美浜町野間海岸、田原市小中山町日の出西の浜、田原市堀切町堀切海岸、豊田市広幡町、豊田市扶桑町、豊田市百月町、豊田市平井町、豊田市水間町、豊田市川田町、豊田市寺部町、豊田市記念橋、南知多町篠島（戸田ほか、2019）。



常滑市, 1999年7月20日, 戸田尚希 採集

【国内の分布】

本州、四国、九州、壱岐、甬列島（秋田・益本, 2016）。

【世界の分布】

朝鮮半島、ウスリー（秋田・益本, 2016）。

【生息地の環境／生態的特性】

河川および海岸砂浜に生息しているが、沿岸域と陸域を隔てる堤防の陸域側で比較的多くの個体が発見される傾向にある。冬季には確認が難しい。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種の生息が確認されているいずれの産地においても個体数は少ない。護岸工事などに伴って海浜植物が減少したことや、河川からの砂の供給が減少していることなどが個体数減少の原因と考えられる。

【保全上の留意点】

現在残されている本種の生息地周辺において護岸工事などの開発を控え、生息環境を維持することが望まれる。

【引用文献】

秋田勝己・益本仁雄, 2016. 日本産ゴミムシダマシ大図鑑, p.191. むし社, 東京.

戸田尚希・長谷川道明・大野友豪・蟹江昇, 2019. 愛知県の甲虫目録 5（ゴミムシダマシ科：スナゴミムシダマシ族）. 佳香蝶 71 (280): 101-111. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

（執筆者 大野友豪・戸田尚希）

クビアカハナカミキリ *Carilia atripennis* (Matsushita)

【評価理由】

愛岐丘陵から三河山地にかけて、広く記録があったが、近年ほとんど生息情報が得られず、著しく減少していると考えられる。

【形態】

体長 7～11 mm。前胸背板は赤褐色。上翅は赤紫色～緑色～青藍色まで変異があるが、本県では青緑～青藍色の個体が多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、春日井市、瀬戸市、豊田市、岡崎市、豊川市、豊橋市、設楽町等、愛岐丘陵から三河山地にかけて広く記録があった（湯澤ほか、1990）。

【国内の分布】

本州、佐渡、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



豊川市，長谷川道明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

県内ではアカマツを寄主植物としていたと考えられ、5月頃にカエデやガマズミの花上で見られた。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年ほとんど生息情報が得られていない。マツ類を寄主植物とする種であるので、松枯れによる影響を強く受けたものと思われる。絶滅危惧Ⅱ類と評価されたが、実際にはより危機的な状況にある可能性もある。

【保全上の留意点】

マツ類の自生する里山の管理。松枯れ対策として使用している薬剤の影響を受けている可能性もある。

【引用文献】

湯沢宣久・蟹江昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 389-433. 愛知県.

(執筆者 長谷川道明)

マイコアカネ *Sympetrum kunckeli* (Selys)

【評価理由】

平成の大合併前の旧市町村単位での絶滅率は 71%、現存数は 15 であり、準絶滅危惧と評価された。愛知県では平地から丘陵地にかけて広く分布していたが、内陸の産地はほとんど消滅し、海岸に近い地域に生き残っている。

【形態】

小型のアカトンボの仲間で、♂の顔面が青白くなることから「舞妓」アカネと名付けられた。♂の腹部は成熟すると赤化する。一方♀の腹部は淡褐色の個体が多いが、赤化する個体も存在する。ただし赤化♀の出現率には地域差があり、愛知県ではほぼ全てが淡褐色型である。

【分布の概要】

【県内の分布】

51 市町村で記録されていたが（吉田ら, 2023）、2024 年には飛島村でも確認された。

【国内の分布】

北海道から九州地方にかけて分布する。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国、ロシア（極東）に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

ヨシなどの抽水植物が多い湿地や池沼、水田などで見られる。

初夏に羽化した後、未熟時は周辺の草むらなどで過ごし、秋になって成熟すると、♂は抽水植物の先端などに止まって♀を待つ。♀が現れると♂はそれを捕捉し、交尾する。その後♂♀は連結したまま、浅い水面に腹を打ちつけて産卵する。卵のまま越冬し、翌春孵化する。

【現在の生息状況／減少の要因】

1970 年代には名古屋市中区や中村区でも確認されており、1980 年代には濃尾平野周辺から広く記録されていた（安藤ら, 1990）。また安藤（2004）は「1980 年代はじめまでは普通に見られるトンボであったが、その後急速に減少した」と述べている。現在、内陸部からはほぼ姿を消し、海に近い地域を中心に生息している。

豊田市に残る産地は、トンボの幼虫に致死的なネオニコチノイド系の農薬が使われていない水田である。水田やそれに連なる池沼等で絶滅したのは、農薬の影響が大きいと考えられる。また生息地である湿地や池沼の埋め立てによっても絶滅、減少している。

【保全上の留意点】

幼虫に有害な農薬を避けること、幼虫を捕食するアメリカザリガニなどを入れないこと、そして湿地や池沼の環境保全が重要である。

意図せずに本種の移植実験を行った事例がある。それは田原市白浜の海を埋め立てた造成地での観察例である。同地は長期間放置された結果、雨水が溜まり、様々な水草等が繁茂して 10 数種のトンボが見られるようになった（吉鶴ら, 2018）。このような造成地は農薬が使われず、天敵も少ないので飛来したトンボが繁殖しやすい。結果的にマイコアカネも非常に多産していた。現在同地にはソーラーおよびバイオマス発電所が作られ、マイコアカネの主要発生地は消滅したが、本種が近隣に残ってさえいれば造成地でも繁殖できる、という貴重な記録である。

【引用文献】

安藤尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上): 9-78. 愛知県.
安藤尚, 2004. 愛知と岐阜のトンボ・分布資料(2). 佳香蝶, 56 (220): 73-80. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.
吉田雅澄・成田茂生, 2023. 愛知県市町村別トンボ分布表 2022. *Aeschna* (59): 33-39.
吉鶴靖則・吉田雅澄・川田奈穂子, 2018. 愛知県田原市でスナアカネとハネビロトンボを記録. 三河の昆虫(65): 919-922. 西三河野生生物研究会, 安城市.

【関連文献】

尾園暁・川島逸郎・二橋亮, 2022. ネイチャーガイド 日本のトンボ 改訂版, 532pp. 文一総合出版, 東京.

(執筆者 吉田雅澄)

ミヤマアカネ *Sympetrum pedemontanum* (Muller in Allioni)

【評価理由】

平成の大合併前の旧市町村単位での絶滅率は70%、現存数は11であり、準絶滅危惧と評価された。平地からはほぼ姿を消し、山地を中心に生き残っている。

【形態】

ハネの中央端部寄りに広い褐色の帯模様を持つアカトンボの仲間である。このようなハネの斑紋を有する日本のトンボは本種とコフキトンボの♀（オビトンボ型）だけである。♂は成熟すると腹・胸・顔が赤化する。一方♀は成熟しても黄褐色のままである。

【分布の概要】

【県内の分布】

平地から山地にかけての37市町村で記録されている（吉田ら, 2023）。和名は「深山」アカネであるが、山間部以外にも分布している。

【国内の分布】

北海道から九州地方にかけて分布する。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国、ロシア（極東）に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から山地にかけての緩やかな流れや水路、水田、大河の河川敷などに生息する。日本のアカトンボはほぼ全種が池沼や水田等の止水で産卵するが、本種だけは例外で、緩やかな流れを好んで産卵する。

初夏に羽化した後、未熟時は周辺の草むらなどで過ごし、秋になって成熟すると、♂は水辺の植物などに止まって♀を待つ。♀が現れると♂はそれを捕捉し、周辺の植物などに止まり交尾する。その後♂♀は連結したまま、浅い流れの水面に腹を打ちつけて産卵する。卵のまま越冬し、翌春に孵化する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市中心部では1970年頃まで見られ、名古屋市東部丘陵では1980年代にも確認されていた（安藤ら, 1990）。また安藤（2004）は「濃尾平野の低平部では極めて稀な種。丘陵地や山地の水田周辺では普通に見られるが、個体数の減少傾向は1980年代終わり頃から著しい。愛知県設楽町裏谷ではアカトンボ6種のうち最も個体数の多いトンボであった」と述べている。

現在本種の衰退はさらに進行している。濃尾平野や岡崎平野とその周辺の丘陵地ではほぼ絶滅し、木曽川の河川敷に少数が見られる程度である。愛知県では和名の通り、山間部に行かないと確認が難しいアカトンボになっている。

農薬の使用や河川改修、圃場整備による生息環境破壊により絶滅することが多いと考えられる。またほとんど人手が入らず農薬の影響も小さいと思われる丘陵地から姿を消す例もあり、その原因はよくわかっていない。

【保全上の留意点】

幼虫に有害な農薬を避けること、そして生息地である河川や水路等の緩やかな流れの保全が重要である。

【引用文献】

安藤尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上): 9-78. 愛知県.
安藤尚, 2004. 愛知と岐阜のトンボ・分布資料(1). 佳香蝶, 56 (219): 49-57. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.
吉田雅澄・成田茂生, 2023. 愛知県市町村別トンボ分布表 2022. *Aeschna* (59): 33-39.

【関連文献】

尾園暁・川島逸郎・二橋亮, 2022. ネイチャーガイド 日本のトンボ 改訂版, 532pp. 文一総合出版, 東京.
杉坂美典・鈴木栄二, 2024. 第3次岡崎市版レッドリスト 2024. 岡崎市.

(執筆者 吉田雅澄)

クロモンチビゴキブリ *Anaplecta japonica* Asahina

【評価理由】

生息地は限定的で、また住宅地に隣接する林で見つかり、開発により生息地がなくなる可能性が高い。

【形態】

約 7mm。全体的に黄褐色であるが、前翅基部が黒色のため「黒紋」の和名を持つ（旭ほか, 2023）。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市（旭ほか, 2024）、豊田市（山中, 2018）。

【国内の分布】

山口県・大阪府・静岡県（辻, 2019）、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本の固有種である。



名古屋市, 2021 年 10 月 8 日, 神谷京香 採集

【生息地の環境／生態的特性】

生態も不明な点が多い。本邦のゴキブリ類としては珍しく秋（特に 10 月）に成虫の記録が集中し、年一化性と考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は小型で非常に俊敏に動き、目視での捕獲採集が難しく、生態も不明な点が多い。

【保全上の留意点】

住宅地に隣接した河畔林や、公園内の林で見つかり、近隣の開発により生息地が奪われることが考えられるため、配慮が必要である。また林床の乾燥化は大敵である。

【引用文献】

- 旭和也・戸田尚希・山岸健三, 2023. 愛知県におけるゴキブリ類の分布について. なごやの生物多様性, 10: 97-102. なごや生物多様性センター, 名古屋.
辻雄介, 2019. 山口県のゴキブリ目 Blattodea (1). 豊田ホテルの里ミュージアム研究報告, 11: 137-146. 下関市立自然史博物館, 下関市.
山中洋, 2018. 本州に於ける四府県自のクロモンチビゴキブリ採集記録. 佳香蝶, 70 (274): 27-28. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

（執筆者 戸田尚希）

オオウスバカゲロウ *Heoclisis japonica* (MacLachlan)

【評価理由】

本種の分布は、海岸沿いに限られており、県内でも豊橋市表浜など一部にしか生息環境はない。今後、地震津波対策などでの砂浜の環境改変では、本種の生息環境も悪化すると考えられる。

【形態】

成虫の前翅長 60mm ほど。日本産のウスバカゲロウでは最大種。幼虫は、いわゆるアリジゴク型だが、漏斗状の巣は作らない。

【分布の概要】

【県内の分布】

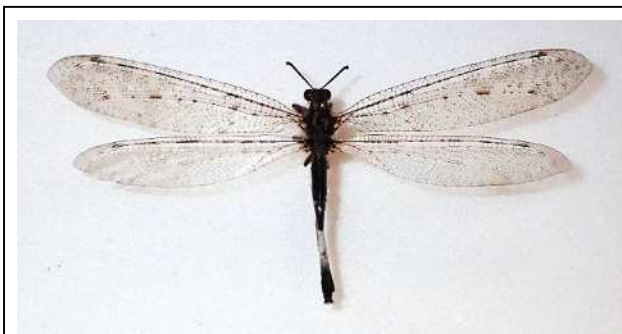
豊橋市（間野，2024）。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。



豊橋市，2013 年 10 月 27 日，間野隆裕 採集

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は海岸などの砂地の草間を徘徊し昆虫類を捕食するが、円錐形噴火口型の巣は作らない。成虫は灯火にも飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息環境の変更はあまり認められない。減少の要因としては、砂浜の砂の減少があげられる。

【保全上の留意点】

生息地である砂浜周辺の環境開発などは慎重を期し、生息地の保全が必要である。

【引用文献】

間野隆裕，2024. 愛知県と北海道のオオウスバカゲロウの記録. 佳香蝶, 76 (298): 32. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

（執筆者 戸田尚希）

アリアケキイロヒラタガムシ *Enochrus bicolor* (Fabricius)

【評価理由】

本種は塩性湿地に生息するが、海岸部は堰堤が整備され、河川以外で塩水が流入する汽水環境が見られなくなった。

【形態】

6.2～7.0mm。背面は橙色味のある黄褐色。中胸腹板突起は板状で三角形に隆起し棘がある。上翅に条溝列がないことで、近似種キイロヒラタガムシとは区別ができる(中島ほか, 2012)。

【分布の概要】

【県内の分布】

西尾市(戸田ほか, 2022)。

【国内の分布】

大阪府(Kawakami & Hayashi, 2010)、岡山県(千田, 2020)、鳥取県(緋田・渡部, 2020)、福岡県(中島, 2020)、大分県(三宅, 2021)、熊本県(Matsui, 1994)。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア極東部～ヨーロッパ、アフリカ(北部)。



西尾市, 2020年6月9日, 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

塩性湿地に生息し、海岸付近の植物が散在する浅い湿地で見つかる。灯火にも飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地での個体数は多いが、生息環境が限定的であるため、現在の生息地が失われれば直ぐに絶滅することが懸念される。

【保全上の留意点】

汽水域という特殊な環境であるため、周辺環境開発などは慎重を期し、生息地自体の保全が必要である。

【引用文献】

- 三宅武, 2021. 大分県初記録の希少なガムシ科3種. 二豊のむし, 59: 100-101. 大分昆虫同好会, 大分.
中島淳, 2020. 福岡県におけるアリアケキイロヒラタガムシの初記録. さやばねニューシリーズ, 39: 52. 日本甲虫学会, 東京.
緋田祐太・渡部晃平, 2020. 鳥取県米子市でアリアケキイロヒラタガムシを採集. さやばねニューシリーズ, 38: 61. 日本甲虫学会, 東京.
千田喜博, 2020. アリアケキイロヒラタガムシ. 岡山県野生動植物調査検討会(編) 岡山県版レッドデータブック 2020, p.238. 岡山県, 岡山.
Kawakami, Y., Hayashi, M., 2010. A new distributional record of *Enochrus* (*Lumetus*) *bicolor* (Coleoptera, Hydrophilidae) from Osaka city, Honshu, Japan. *Elytra*, 38: 25-26.
Matsui, E., 1994. Three new species of the genus *Enochrus* from Japan and Taiwan (Coleoptera: Hydrophilidae). *Transactions of the Shikoku Entomological Society*, 20: 3-4.
戸田尚希・大野友豪・吉村優杏, 2022. 愛知県からアリアケキイロヒラタガムシを採集. さやばねニューシリーズ, No.44: 59. 日本甲虫学会, 東京.

(執筆者 戸田尚希)

ヨツボシマグソコガネ *Aphodius sordidus sordidus* (Fabricius)

【評価理由】

牧場周辺の住民から、衛生環境の改善要望等により牧場が新設移転したことや、牧場の廃業など、生息環境が減少したため生息地が奪われ減少している。かつては市街地近郊や丘陵地にあった牧場も姿を消し、近年生息は確認されていない。残された牧場も少なく、少しの土壌改善でも生息に影響がでることから、継続発生が危惧されている。

【形態】

5～7mm。上翅の黒紋には変異があり、肩歯を持たない。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市、豊橋市（戸田ほか, 2022）。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、佐渡、伊豆諸島、対馬（上野ほか, 1985）。

【世界の分布】

朝鮮半島、シベリア、コーカサス、ヨーロッパなど。



豊田市, 2013年10月27日, 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

春季と秋季に日当たりの良い獣糞に集まる。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在は県内1カ所の牧場のみの一部の区画でしか確認されていない。

【保全上の留意点】

生息する牧場の土壌改良や、放牧の減少が生息に影響するため、これらを行う際には配慮が必要である。

【引用文献】

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編, 1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅱ), 514pp. 保育社, 東京.
戸田尚希・長谷川道明・春田祥博・安居義高・中村俊雄・大野友豪・蟹江昇, 2022. 愛知県の甲虫目録9（コガネムシ科：ニセマグソコガネ亜科, マグソコガネ亜科）. 佳香蝶, 74 (289): 1-19. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

（執筆者 戸田尚希）

オオマルチビゴミムシダマシ *Caedius maderi* Kaszab

【評価理由】

砂粒径の大きい海岸砂浜に生息する種で、県内からは田原市の3か所と三河大島しか生息地が知られていない。健全な生息地では見つかるが、生息環境は狭いため海岸の護岸工事などによる生息地そのものの消失が懸念される。

【形態】

体長 4.9～6.3mm。背面は黒色で光沢は鈍く、灰色の分泌物で覆われていることが多い。後翅は退化する。

【分布の概要】

【県内の分布】

田原市伊良湖町伊良湖岬、田原市堀切町堀切海岸、田原市小中山町立馬崎、蒲郡市三河大島（戸田ほか，2019）。

【国内の分布】

本州、四国、九州、大隅諸島、トカラ列島、琉球、伊豆諸島（秋田・益本，2016）。

【世界の分布】

カンボジア（秋田・益本，2016）。



田原市，2019年5月12日，戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

砂粒径の大きい砂浜を好む傾向があるとされるが、近年県内で生息が確認されている砂浜の砂粒径は特別に大きいわけではない。生息地にはハマヒルガオが生えており、日没前にはその根元で活動、交尾している。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息環境に指向性が高く、県内での生息地は限られており、護岸工事などに伴って生息環境が損なわれる危険性が高い。

【保全上の留意点】

現在残されている本種の生息地周辺において護岸工事などの開発を控え、海浜植物が豊富に生育できるような環境を維持することが望まれる。

【引用文献】

- 秋田勝己・益本仁雄，2016. 日本産ゴミムシダマシ大図鑑，p.191. むし社，東京。
戸田尚希・長谷川道明・大野友豪・蟹江昇，2019. 愛知県の甲虫目録 5（ゴミムシダマシ科：スナゴミムシダマシ族）. 佳香蝶，71 (280): 101-111. 名古屋昆虫同好会，名古屋。

（執筆者 大野友豪・戸田尚希）

シナスナゴミムシダマシ *Gonocephalum klapperichi* Kaszab

【評価理由】

主に河川下流域に生息する種で、県内からは矢作川、豊川、木曽川、庄内川といった大河川中・下流域の河川敷から主に確認されている。健全な生息地では見つかるが、河川敷の護岸工事などによる生息地そのものの消失が懸念される。

【形態】

体長 7.8～8.9 mm。背面は黒色で光沢は鈍く、灰色の分泌物で覆われていることが多い。生息地ではよく似た同属種と混生しており、前胸後角が鋭く尖ることや、上翅間質に3列の茶褐色の毛が生えること、前脛節先端が広がらないことなどから識別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市旭町小渡、豊田市足助町香嵐溪、豊田市時瀬町上時瀬、豊田市樽俣町樽俣、豊田市百月町百月、豊田市西広瀬町西前、豊田市東広瀬町ヲゴソ、春日井市玉野町、西尾市一色町竹生新田、西尾市港町、豊橋市賀茂町井ノ下（戸田ほか, 2019）。

【国内の分布】

本州、九州（豊後姫島）、伊豆諸島（新島）（秋田・益本, 2016）。

【世界の分布】

中国（秋田・益本, 2016）。



豊田市, 1998年6月28日, 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

河川中・下流域の砂地を好み、枯死したイネ科草本の堆積下などで見つかる。地表を主な生息圏にしていると考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在確認されている産地において一度に多くの個体を確認されることは少ないが、大河川中・下流域においては比較的安定して確認できている。ただし、近年河川の護岸工事が盛んに行われた結果、生息地の分断が進み、各地の個体群が脆弱になっていると考えられる。

【保全上の留意点】

現在残されている本種の生息地周辺において護岸工事などの開発をなるべく控え、本種の生息環境を維持することが望まれる。

【引用文献】

秋田勝己・益本仁雄, 2016. 日本産ゴミムシダマシ大図鑑, p.191. むし社, 東京.
戸田尚希・長谷川道明・大野友豪・蟹江昇, 2019. 愛知県の甲虫目録 5（ゴミムシダマシ科：スナゴミムシダマシ族）. 佳香蝶, 71 (280): 101-111. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

（執筆者 大野友豪・戸田尚希）

ヒラヤマコブハナカミキリ *Enoploderes bicolor* K. Ohbayashi

【評価理由】

1990年代に生態が判明し、三河地方に広く分布していることが知られるようになったが、かつて多産地であった本宮山では近年確認が困難になってきており、またかつて生息が確認されていた豊橋市平野部では生息が確認できなくなっている。

【形態】

体長 9～13 mm。体は黒色。上翅は光沢のない朱赤色で明瞭な深い点刻列がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市、岡崎市、豊橋市、新城市などから記録があり、三河地方に広く分布していると思われる。尾張地方からは公表された記録は見当たらない(湯澤ほか, 1990; 間野, 2018)。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

近年、韓国でごく近縁な種が発見された。



豊橋市, 長谷川道明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

生活史の大半をアカメガシワなどの大径木にできた洞内で過ごす。成虫は4月頃に出現し、交尾、産卵も洞内で行われるが、飛行中のものや、カエデなどの花上で見られることもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

生活史の大半を占める洞をもつ大径木の減少や採集圧が考えられる。本種は複数年にわたって、同じ洞を利用すると考えられることから、同好者が洞内にいる本種を燻りだして採集するため、殺虫スプレーやタバコの煙を使用することによる悪影響がでている可能性も否定できない。

【保全上の留意点】

現在確認されている生息地の環境の維持。特に産卵に利用されている大径木の保全が重要である。

【引用文献】

湯澤宜久・蟹江昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫 (上): 389-433. 愛知県.
間野隆裕編, 2018. 愛知県の生物多様性 グリーンデータブックあいち 2018 昆虫編, 280pp, 愛知県環境部自然環境課.

(執筆者 長谷川道明)

ヤマトヒメハナカミキリ *Pseudopidonia yamato* (Hayashi et Mizuno)

【評価理由】

太平洋型のブナ林を代表するカミキリムシで、県内では奥三河地方に分布するが、県内ではブナ林は限られており、またニホンジカの食害による影響による林床の乾燥化など、生息基盤が危うくなっている。

【形態】

体長 6.8～11.6 mm。オスは上翅会合部の黒紋（S 紋）は太く、前端は小楯板手前で急に消失する。メスの上翅は、ほぼ黒色で小楯板周辺に 1 対、中央に 2 対、翅端近くに 1 対の黄色紋がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

奥三河地域のブナの原生林が残されている地域で確認されている（湯澤ほか, 1990；窪木, 2024）。

【国内の分布】

静岡県以西の本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



奥三河地域, 長谷川道明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

ブナ原生林など自然度の高い森林に生息する。成虫は 6 月頃に出現し、タンナサワフタギなどの花に集まる。幼虫の寄主植物や生態については不明な点が多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

ニホンジカの増加により、生息地の環境が悪化している。特に林床の乾燥は本種に大きな影響を与えていると推測される。

【保全上の留意点】

現在の主要生息地である面の木峠、裏谷原生林の環境を維持することが重要。

【引用文献】

湯澤宜久・蟹江昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫 (上): 389-433. 愛知県.
窪木幹夫, 2024. 月刊むし・昆虫図説シリーズ 15 日本のヒメハナカミキリ, 168pp. むし社, 東京.

(執筆者 長谷川道明)

クロホソコバネカミキリ *Necydalis harmandi* Pic

【評価理由】

県内では奥三河に僅かに残されたブナ林に依存して生息しているが、他府県にくらべ存続基盤が脆弱であると判断される。加えてニホンジカの食害によりブナ林の環境が急速に悪化している。

【形態】

体長 14～21 mm。色彩の変異が多様だが、オスでは通常触角は黒色、上翅は褐色で肩部から翅端部にかけて太く黒色で縁取られる。メスでは触角第 2～5 節が灰白色で上翅は通常黒色。

【分布の概要】

【県内の分布】

奥三河地域のブナの原生林が残されている地域で確認されている（湯澤ほか，1990）。

【国内の分布】

本州、四国、九州（四国、九州産は別亜種として区別されることもある）。

【世界の分布】

日本固有種。



【生息地の環境／生態的特性】

ブナの原生林など、自然度の高い森林に生息する。成虫は 7 月頃出現し、ブナやミズメ、ナナカマドなどの立ち枯れにみられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

ニホンジカの増加により、生息地の環境が悪化している。特に林床の乾燥は本種に大きな影響を与えていると推測される。

【保全上の留意点】

現在の主要生息地である面の木峠、裏谷原生林の環境を維持することが重要。

発生木は長年にわたって使用すると考えられることから、本種が発生又は将来の発生が期待できるブナ等の立ち枯れ木は安易に伐採せず、維持する必要がある。

【引用文献】

湯澤宜久・蟹江昇・河路掛吾・竹内克豊，1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫（上）: 389-433. 愛知県.

（執筆者 長谷川道明）

セダカコブヤハズカミキリ *Parechthistatus gibber* (Bates)

【評価理由】

比較的自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、後翅が退化して移動能力が小さいため、地域ごとの固有化が進んでいる。県内では僅かに残された自然林に依存して生息しているが、生息地は限られ、分断されている。また各生息地での状況は悪化しており、個体数の減少が見られる。

【形態】

体長 10.5～22 mm。本県に分布するのは、関東地方から近畿地方にかけて分布する亜種 *shibatai* Miyatake に分類されるが、亜種内でも地域変異が認められる。本県に分布するものは、美濃三河高原に産する個体群とほぼ同一の特徴をもち、表面の微毛は淡い茶褐色で上翅先端部の尖りは弱い。

【分布の概要】

【県内の分布】

三河山地に広く分布している（湯澤ほか、1990）。

【国内の分布】

関東地方以西の本州、四国、淡路島、小豆島、九州、隠岐、対馬に分布。多数の亜種が記載されている。本県に分布する亜種は関東地方から紀伊半島北部にかけて分布する（高桑ほか、2020）。

【世界の分布】

対馬亜種と同亜種が韓国（麗瑞島）から記録されている。



三河山地, 長谷川道明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

三河山地の自然度の高い森林に生息する。新成虫は夏～初夏に出現し、新しい枯葉を後食し、成虫で越冬。翌年 5 月下旬頃より活動をはじめ、幼虫の寄主植物であるブナやイヌシデなどの倒木等に見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

ニホンジカの増加により、生息地の環境が悪化している。特に林床の乾燥は本種に大きな影響を与えていると推測される。また、同好者に人気の種であることから、採集圧も受けやすいと考えられる。

【保全上の留意点】

現在の主要生息地である面の木峠、裏谷原生林の環境を維持することが重要。

【引用文献】

湯澤宜久・蟹江昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫 (上): 389-433. 愛知県.
高桑正敏・中村博之・小林敏夫, 2020. 月刊むし・昆虫図説シリーズ 13 日本のコブカヤハズカミキリ, 162pp. むし社, 東京.

(執筆者 長谷川道明)

クシヒゲハイイロヒメシャク *Antilycauges pinguis* (Swinhoe)

【評価理由】

生息環境が不安定で生息場所も極めて限定されている。

【形態】

開帳約 19 mm、♀はやや大きい。灰白色の地に灰褐色点を帯状に散布する。♂の触角は櫛葉状で羽の地色は全体的に濃い。

【分布の概要】

【県内の分布】

田原市（間野・篠木, 2024）。

【国内の分布】

三重県と愛知県の伊勢湾岸を東北限に福岡県（河村, 1984）、対馬（佐藤, 1988）、石垣島と愛媛県（井上, 1982）、宮古島（金子, 2011）、喜界島（鹿児島県）（木村, 2020）、南浮原島（新田, 2017）、久高島（沖縄県）、徳之島・与論島（鹿児島県）（木村, 2022）から記録がある。



田原市, 2023 年 9 月 17 日, 間野隆裕 撮影

【世界の分布】

台湾、中国東部からインドシナ半島に分布する（金子, 2011）。

【生息地の環境／生態的特性】

5 月から 10 月にかけて不連続的に発生し、年 3 世代位を繰り返すと考えられる。食草は塩生植物シチメンソウ *Suaeda japonica* Makino（ヒユ科）が確認されているが（大塚ほか, 2023）、シチメンソウが生育しない本県では不明。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内においては田原市伊川津町貝ノ浜が唯一の記録で、生息可能な塩生湿地環境が県内でほとんど見られない。またその塩生湿地は、気象の変化に非常に敏感で不安定な環境下にある。

【保全上の留意点】

生息環境の保全が急務と考えられる。

【特記事項】

2024 年に国内における本種の生息環境の不安定な現状が明らかになった（間野・篠木, 2024）。

【引用文献】

- 新田智, 2017. クシヒゲハイイロヒメシャク南浮原島産飼育. ありんくりん通信, 19: 3-4.
井上寛, 1982. シャクガ科, 井上寛ほか. 日本産蛾類大図鑑 1: 425-573, 2: 55-108. 講談社, 東京.
金子岳夫, 2011. シャクガ科ヒメシャク亜科, 岸田泰則編. 日本産蛾類標準図鑑 1: 224-247. 学研教育出版, 東京.
河村忠, 1984. 福岡県産蛾類目録. 北九州市立自然史博物館自然誌資料 1, 339 pp. 北九州市立自然史博物館, 北九州.
木村正明, 2020. 喜界島で昼間に採集した蛾類の記録, Satsuma, 166: 93-94. 鹿児島昆虫同好会, 鹿児島.
木村正明, 2022. 奄美群島のクシヒゲハイイロヒメシャクの採集記録, Satsuma, 170: 93. 鹿児島昆虫同好会, 鹿児島.
間野隆裕・篠木善重, 2024. クシヒゲハイイロヒメシャクの愛知県と三重県からの記録および生息環境について. 誘蛾燈, 255: 4-6. 誘蛾会, 豊橋.
大塚陽香・奥園元晴・矢野文士・日南瑤・徳田誠, 2023. PP19 クシヒゲハイイロヒメシャクの生態および塩生植物シチメンソウ立ち枯れとの関連. 日本昆虫学会第 83 回大会プログラム.
https://entsoc.jp/meeting/2023/2023_program_v2.pdf
佐藤力夫, 1988. クシヒゲハイイロヒメシャク対馬に産す. 誘蛾燈, 113: 105. 誘蛾会, 豊橋.

（執筆者 間野隆裕）

キバナガヒラタゴミムシ *Onycholabis nakanei* Kasahara

【評価理由】

本種の県内での分布は、1979年に北設楽郡豊根村のみが確認されており、その後の記録や確認例は見当たらない。絶滅している可能性もあるが、調査も不十分と思われ情報不足である。

【形態】

大あご、触角、肢が非常に伸長し、触角の第3節から細毛を有することで、他のヒラタゴミムシ類からは一見して識別できる（山崎・森田, 2022）。

【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽郡豊根村富山（山崎・森田, 2022）。

【国内の分布】

愛知県、長野県（早川, 1996）、静岡県（田形・多比良, 1988）、神奈川県（Kasahara, 1986）。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

河川敷の水しぶきがかかるような水辺に生息する極めて好湿性な種である。採集例は主に灯火に飛来したものが多く、愛知県の本種も天竜川（佐久間湖）の河岸付近で、やはり灯火に飛来したものである（山崎・森田, 2022）。

【現在の生息状況／減少の要因】

河川が護岸改修され、河川敷の岩や石が減少し水の流れも穏やかになってきている。水域と陸地の境目がはっきりと分かれた状態は、湿潤な環境を好む本種の生息には適さない。

【保全上の留意点】

河川環境の改修には、周囲の湿潤環境に配慮した改修が必要である。周囲の乾燥化は、昆虫類の生息地を奪うことになる。

【引用文献】

- 早川広文, 1996. 長野県のゴミムシ第Ⅱ報. まつむし, (87): 1-59. 松本むしの会, 松本.
Kasahara, S., 1986. Occurrence of *Onycholabis* (Coleoptera, Carabidae) in Japan. Papers on entomology presented to Prof. Takehiko Nakane in commemoration of his retirement. *Special Bulletin of the Japanese Society of Coleopterology, Tokyo* (2): 75-80.
田形和弘・多比良嘉晃, 1988. 平野橋（安倍川中流）の燈火に飛来した歩行虫類. 静岡の甲虫, 6 (1): 17-21. 静岡甲虫談話会, 静岡.
山崎隆弘・森田誠司, 2022. 愛知県のキバナガヒラタゴミムシ *Onycholabis nakanei* Kasahara の記録. 佳香蝶, 74 (292): 107. 名古屋昆虫同好会, 名古屋.

（執筆者 戸田尚希）

ヨツボシゲンセイ *Megatrachelus politus* (Gebler)

【評価理由】

本種の県内での分布は、1852年の茶臼山の標本が最後であり、これ以降の記録や確認情報が無い。本種の幼虫は、ハナバチ類の巣に寄生すると推測されているが、近年のハナバチ類の減少（多田内, 2020）に伴い、本種も影響を受けているものと推測される。本県での本種の生息情報が途絶えてすでに 70 年が経っており、既に絶滅している可能性も否定できないが、「絶滅」と判断するにはあまりにも情報が不足しているため「情報不足」と評価された。

【形態】

9～12mm。前胸背板は、光沢のある黒色。上翅は黄褐色で 4 個の黒紋があるが、黒紋はその一部または全部が不明瞭となり、ときに消失する（黒澤ほか, 1985）。

【分布の概要】

【県内の分布】

茶臼山（北設楽郡豊根村）。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国北東部、モンゴル、シベリア東部。



豊根村, 1952 年 8 月 2 日, 岩月学 採集

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫はハナバチ類の巣に寄生するものと推定されるが未知。成虫は夏に現れ、花に来る（黒澤ほか, 1985）。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息環境の変更はあまり認められない。減少の要因としては、ハナバチ類の減少が考えられる。

【保全上の留意点】

生息地周辺の環境開発などは慎重を期し、生息地の保全が必要である。また、ハナバチ類の保全とリンクする必要がある。

【引用文献】

黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之, 1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅲ). 514pp. 保育社, 東京.
多田内修, 2020. 野生ハナバチ類の分類, 生態, その減少と保全. 農業および園芸, 95 (4): 291-300. (株)養賢堂, 東京

(執筆者 戸田尚希・長谷川道明・蟹江昇)

キアシアオハムシダマシ *Arthromacra flavipes* Nakane

【評価理由】

本種は、これまで三重県以西に分布する種とされていたが、長谷川ほか(2019)により、1968年に豊田市稲武町(北設楽郡稲武町)で採集された標本が確認された。その後、県内各地を調査しているが、上記の標本以外の情報は得られていない。

本種については、本県が分布の東限域にあたることから、本県の生物多様性保全の重要種と考えることができる。加えて、1968年に採集された1点の標本以外、追加情報が得られないことから、本種の生息環境が著しく損なわれている可能性がある。以上のことから、「情報不足」として評価された。今後重点的に情報を蓄積していく必要がある。

【形態】

体長7.7～10.8mm。背面は金緑色で、上翅肩部に角張った縦稜がある。タカハシアオハムシダマシ *Arthromacra takahashii* に似るが、腿脛節は、ほぼ一様な黄褐色であることから区別できる。腹部末端節は黒褐色(秋田・益本, 2016)。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市稲武町(長谷川ほか, 2019)。

【国内の分布】

本州(愛知県以西)、四国。



豊田市, 長谷川道明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

西日本(京都府・三重県以西)や四国での観察例では、海岸近くの照葉樹林から1,900m程の亜高山帯にかけて広い垂直分布をもつ種で、シイやミズキなどを訪花する(秋田・益本, 2016)。アオハムシダマシ属(*Arthromacra*)の種は、形態が互いに似通っていることや色彩変異に富むことから同定が難しく、多くの種が混同されるなど、長らく分類が混乱した状態にあった。現在の分類に定まったのは比較的最近になってからである。本県からは4種が確認されている(長谷川ほか, 2019)が、アマチュアの昆虫同好者には人気がなく関心を引きにくい存在であったこともあり、県内での記録や標本等の情報が不足している。アオハムシダマシ類の幼虫は林床の湿潤な腐朽材を穿孔して食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内では1968年以降の記録や確認が無いので、詳細は不明であるが、旧稲武町の採集地と推測される周辺はニホンジカによる食害がひどく、地表や倒木の乾燥化が顕著に進んでいる。

【保全上の留意点】

日本産のアオハムシダマシ属の種は、金緑色～赤色の強い金属光沢をもつ中型の甲虫の一群で、形態が互いに似通っており、愛知県内でも、何種かは山地の花上などで普通に見られる。

色彩変異に富むことから同定が難しく、ニホンジカやニホンカモシカによる下草や低木の食害を早急になくしないと森林の乾燥が進み、続々と昆虫が減っていくと考えられる。

【引用文献】

秋田勝己・益本仁雄, 2016. 日本産ゴミムシダマシ大図鑑, p.302. むし社, 東京.

長谷川道明・戸田尚希・蟹江昇, 2019. 愛知県の甲虫目録4 愛知県のアオハムシダマシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (29): 27-32. 豊橋市自然史博物館, 豊橋市.

(執筆者 戸田尚希・長谷川道明・蟹江昇)

【 情報不足種 】

1. ヘイケボタル *Luciola lateralis* Motschulsky

コウチュウ目 ホタル科 (国：リスト外)

ゲンジボタルと並んで光るホタルとしてよく知られた種。かつては県内の平野部から山間部にかけて水田やその周辺環境に広く生息していたが、平野部～丘陵地で生息確認情報が乏しくなっており、今後絶滅危惧カテゴリーに移行する可能性が高いと考えられる。

(執筆者 長谷川道明)

2. キリシマミドリシジミ *Chrysuzephyrus ataxus kirishimaensis* (Okajima)

チョウ目 シジミチョウ科 (国：リスト外)

県内では未記録であったキリシマミドリシジミが田中佑歩・西部俊希 両氏により 2018 年 12 月 29 日 新城市七郷一色の植林地内アカガシから越冬卵として 5 卵採集された。この卵から翌年 2019 年 5 月に 2 ♀が羽化した。なお、同地での成虫は未確認である。

(執筆者 江田信豊・魚住泰弘)